

# ヨーロッパ

## の 旅

平井信義

めぐり会い——私はこのことばが、運命的な響きを持っているのを感じる。予期もしなかった人に会い、その人が私の心をゆきぶるような時に、このめぐり会いということばが、私の心をとらえるのである。そのめぐり会いが次第に発展していく場合もある。しかし、一々二回のめぐり会いで終ってしまったものが、その後の人生に繰り返して現れてきて、その人を強く支配するようなことがある。倉橋先生とのめぐり会いは、昭和十五年の秋であった。その時は学生であった私は、幼児教育界の元老の前で、何か恐れを感じ、小さくなっていった。しかし、その後七年、終戦後の或る日、先生のお宅に招かれて以来、そこに足を運ぶのが楽しみでならない——という気持ちに満たされた。その時々のお話は他愛のないもの——と思われたそのお話が、今となって、しばしば私の心をとらえるのである。

一年間のヨーロッパの滞在中のめぐりあいを、いま、目をつぶって思い返してみると、私の脳裡によみがえってくる顔・顔・顔は、ふしぎに、お年寄りが多い。私の下宿していたフランクフルトのベッカー婆さん、ケルンのベッセルさんは、いずれも半年ずつのつき合いであったから、思い出が多いのは当然であるが、学会でコペンハーゲンにいった時に泊めてもらった家のハルゲンさんも、六十を越えた年寄りであった。それに、日本にも来られたことのある小児科の元老ボッセルト教授も、その疑いは七十歳を越えるであろうか。ボッセルト教授には、わずか二回しかお目にかかることが出来なかったが、その日のことがよく思い出されるのである。それに、同じ小児科の元老クラインシュミット教授。この方とは、僅か三々四時間めぐり会いであったが、しみじみと暖い雰囲気がい思い出されるのである。

めぐり会い——その中で、私の心を暖かく包んでくれるような、その人のいる場所に自分を置くだけで心鎮まるような人たち……。クラインシュミット教授には、ボンで開かれた小児科学会の折に日本から来た若い学徒ということで紹介されたのであったが、金縁の眼鏡の奥に光っている目差しはその奥には、私をいたわる気持ちが動いているのを感じ取ることができた。

「一度、私の家にお招きしたいのだが」と大きな手を差し延べながら教授はいった。

「ええ、喜んで……」

と、私は教授の手を握りしめるようにして答えた。

この時のめぐり会いは、多勢の雑踏の中で、ほんの一分でしかなかったろう。学会が始まると、前の方の席につつましく坐っている教授の横顔が、時々、私の目に映ることはあったが、その日は、もはや話をする機会はなかったのである。しかし、その日から、教授が私を招待してくれるだろうか——という期待が、私の胸に往來した。世界的な研究業績を持っている教授である。しかも、私とは全く専門のちがう小児結核の大家である。名誉教授になられたとは言え、いろいろと忙しい仕事を持っておられるであろう。その日がいつ来るか、——私は期待を持ちながらも、その日は恐らく来ないのではないか、と思ったりした。

それから一ヶ月ほどした或る日、図書室で文献の整理をしていると、女の人が一通の手紙を持ってきてくれた。「クラインシュミット教授からですよ」と、その声は弾んでいる。偉大な教授から私に手紙が来た——ということだけで、私の名誉が増したような響きが、その声に含まれていた。私は、

「ありがとう」といって、その女の人の青い目を見返した。その女の人も、左の目尻に軽く皺を寄せて微笑し返した。

教授からの手紙は、タイプライターで打たれた簡単なものであった。「六月二日の日曜日、午後のお茶の時間に、お出で下さいませんか。お返事を下さい」——ただ、それだけのものであった。しかし、私の胸は躍った。すぐに返事を書いた。

その日曜日は、曇り空で、雨が降りそうでもあり、一日もちそうでもあった。ケルンから一時間半、汽車にゆられて南へ下った。目

的の小さな駅に下り立った時にも、曇った空は、少しも動かずに、降るでもなく暗れる様子も見えなかった。さて、——と、ブラットフォームから改札口に行く道で考えた。「教授の家を、地図を買った上で見つけようか、或いは、駅前で誰かに聞こうか——」。こうした考え方は、ヨーロッパに滞在中、必ずつきまどってくる習慣になっていた。訪問する先の人に駅で迎えられるということは、殆んどなかったからである。ドイツに着いた時、ダネール氏夫妻に空港で迎えられたが、これは日本にいる時から手紙で依頼しておいたことでもあり、ダネール氏夫妻は日本で二十年以上も生活していた方であった。しかし、ドイツでドイツ人に招かれた時には、駅での出迎えを受けたことはなく、私もそれを当然のことに思うようになっていたのである。

考えてみれば、町の名前と家の番地を知っていれば、家を探すのには余り困難がないのである。町の名前は、実はその家の面している通路の名前であり、それには、ベートーベン通りとか、シューベルト通りとか、有名人の名前がついていることが大部分であった。その上、通りのいずれかの側が奇数番であり、右が偶数番であるから、そのいずれかに該当する側を見ていけば、かんたんに目的の家を見つけることが出来るのである。それゆえ、通りに行く道順さえ何かの形で知ればよい。そうした気安さは、もう十ヶ月の滞在であったから、私の心にしみついていた。

しかし、改札口に近付くと、私はびっくりした。クラインシュミット教授の顔が、改札の駅員の肩越しに見えるではないか。初めての経験であった。私はどぎまぎした。改札掛りに切符を渡すのも

どかしく、私は教授の側へ急いだ。

差し延べられた大きい手。私は、その手を握りしめた。「お招きいただいて、光栄です」「ようこそ、お待ちしていました。家内もです」

私より背の高い教授のその肩に寄り添うようにして、私は歩度を揃えた。「ちょっと判りにくい道なので、散歩がてら、迎えに来ました。この辺は、ドイツでも田舎町なものですから」と、教授は、私の謝辞を受けて、静かな、しかし澄んだ声で答えられた。そして、道すがら、この町の歴史について簡単に説明した。

その説明が終ると、ちょうど開き始めた紫や桃色の花が、籬に沿って咲いている前に来ると、立ち止まって、その名前を教えてください。その名前は、今はおぼえていないけれども、大柄の紫の花びらの中に、したたるばかりに黄色い花粉のついている雄しべが並んでいた。

教授の家は、小じんまりした感じのするもので、門から玄関まで数歩の距離であった。しかし、振り返ると、いつの間にか高低い丘の上になっていて、右手の方は、屋根越しに、町並みがなだらかに下っていくのが見えた。

「静かな、いい場所ですね」と私はいった。

「ええ、静かです。美しい土地です。爆撃にも会わず、町も昔のままですから」

教授がベルを押すと、間もなく婦人が現れた。

「ようこそ」とことば少なく言って、二人を玄関から左手の明るい部屋に招き入れた。

すずめられた椅子に坐ると、教授は何人かの日本人の消息をきいた。私はそれぞれの方々の元気な報告をすると、うれしそうにうなずかれて「日本の学者は、よく勉強しますか」といった。「いまの私の仕事は、第一線から退いて、諸外国の文献を読んで、それを抄録することに追われています。時々、診てくれといわれるので、ここにこんなに小さな設備はしてありますが……」と椅子から立ち上がり、開き戸棚のようになった扉をあけると、手洗いと尿の検査道具などのおいてある棚を見せてくれた。「これが総てです」といつて笑った。

席に戻ると、二人の間には会話が途切れた。家の中は、全く人声がない。奥さんはお茶の用意をしているのであろうが、その音もしない。外からのもの音も、人声もしない。子どもの声もしないのである。こうした沈黙が続くと、その時間とともにだんだんと重苦しい気持になることが多い。殊に親しい間柄でない時、その重圧には耐えられない程のことがある。そんな時、つい、心にもないことを言ってしまうことがある。

ところが、こうして教授の前に坐っていると、全く重圧を感じない。その目差しは、私の頭越しにぶこかを見ているようであるが、心は、私たちを包んでいる静寂にひたり切っているようである。椅子に肘をついて、軽く組み合わせた指は、もう長いこと動かないように見える。

私は、目を窓越しに、町並みに向けた。赤い屋根・青い屋根が、それぞれブロックで囲まれた煙突をのせて、右を向き左を向きしている。薄い煙が、そこから流れ出している屋根もある。所々に、屋

根をきえぎぎって木立ちが茂っている。その上に、何の鳥か知らないが、四つ五つ、点のように舞い上っては舞い下りるのが見える。風のない日であった。

「静かでしょう」

と、教授がいった。

「ええ」

教授の目差しが窓の方に移ると、再び静寂が訪れた。私も、教授とともにいて、静寂を味わっている。このような経験は、ドイツに来て初めてであった。

「本当に静かですね」と私がいった。

「ええ」と、教授は微笑した。

その時、台所の方でガタガタと音がして、そこに通ずる戸口の把手が廻った。教授はゆっくりと立ち上がり、大股でその把手をつかみ、大きく戸口を開いた。奥さんが、湯気の立っている食台を手で押しながら、入ってくるころであった。その食台は、しきいを通る時にちょっと音を立てたが、ゴム輪のついている四つの車は、じゅうたんのの上にとると、再び音を消した。

「コーヒーはお好きですか」と夫人は私に向かってくる。

「日本人は、もうとくにコーヒーに憧れているよ」——と教授は、私の答えを待たずにいった。

「あなたも？」

「ええ、大好きです」

背の高い夫人は、大きな腕を私の前に見せながら、三組の茶碗をおき、コーヒーポットから、ついで廻った。教授は、私に砂糖をす

すめながら、菓子皿を台から低い食卓に移して置いた。

「西洋の音楽は好きですか？」

「ええ、大好きです。殊に、シューマンの作品が好きです」

「それはすばらしい。何かレコードをきかせましょうか」

「私は、シューマンのクライスレリアーナをきいた時、何か目がきめたように感じました」

「あの曲は、ドイツ人にだって、あまり知られていない曲ですね」

夫人も、驚いたような表情をして、私を見詰めた。

「では、と立ち上がりながら、私の背の方にある蓄音機の方に歩み寄り、腰をかがめた。

しばらくして、レコードが鳴り出した。ベートーベンのピアノソナタ百十一番であった。

「ご存じですね。こちらの席にいらっしゃい。こちらの方がききよいから……」

と、教授は自分の坐っていた椅子を私に示し、テーブルをひと廻りして、茶碗の位置をかえた。夫人も坐った。

再び私たちの会話は途切れた。ソナタだけが、レコードの溝の回転の流れをビクアップに伝えながら、流れてくる。教授は、コーヒーをひと飲みしてから軽く目をつぶった。その顔を追うようようにして、夫人もコーヒーをのんだ。

めぐり会い——このことについて、書こうと思いついて、クラインシュミット教授にお目にかかった時のことを頭の中で整理している中に、倉橋先生のことや頭いっばいに拡がってしまった。